

令和5年2月
大学院文学研究科

顧 偉長 提出 学位申請論文
『中国語を母語とする日本語学習者の日
中同形異義語における誤用を減らすた
めの学習法—日中同形語の対照情報を
学習者に提示する方法を用いて—』
審査報告書

國 學 院 大 學

顧 偉長 提出 学位申請論文

『中国語を母語とする日本語学習者の日中同形異義語における誤用を減らすための学習法—日中同形語の対照情報を学習者に提示する方法を用いて—』 審査要旨

論文の内容の要旨

本論文は、中国語を母語とする日本語学習者による日中同形異義語の誤用を減らすために、同形異義語補助教材と学習法開発の視点から日中同形語の対照情報を提示する学習法の効果を検証した研究である。本論文は序章、第一部四章、第二部五章、第十章によって構成されている。

序章では、研究の目的を述べ、先行研究のうち王燦娟の提唱する分類法をもとに日本語と中国語との間に意味のズレのある、O (1) 型（日中共有義＋日本語独自義）、O (2) 型（日中共有義＋中国語独自義）、O (3) 型（日中共有義＋中国語独自義＋日本語独自義）、D 型（中国語独自義＋日本語独自義）の 4 タイプに分類して考察するとしている。

第一部は第 1 章「現代日本語書き言葉における日中同形異義語についての量的調査」、第 2 章「日本の教科書における日中同形異義語についての量的調査」、第 3 章「日本語習熟度の違いが同形語意味処理に与える影響（中国語義による言語転移）」、第 4 章「日本語習熟度の違いが同形語意味処理に与える影響（日本語独自義の習得）」の 4 章で構成されている。第 1 章では、国立国語研究所（2015）BCCWJ 現代書き言葉均

衡コーパスを用いて現代日本語における同形異義語のうち、O (1) 型 24.8%、O (2) 型 26.7%、O (3) 型 22.3%で日本語と中国語の間で共有義を持つ O 型が 7～8 割を占めるのに対して D 型が 26.2%であり、出現頻度の順位が 1000 に近い頻用される同形異義語は O (1) 型が 33 語で最も多く、O (2) 型と O (3) 型が 28 語でこれに次ぎ、共有義を持たない D 型が 16 語で最も少ないことを明らかにしている。第 2 章では、BCCWJ 現代書き言葉均衡コーパスにおける日本の教科書のデータベースから抽出した同形異義語のタイプ別の割合は共有義を持つ O 型のうち O (1) 型 25.9%、O (2) 型 29%、O (3) 型 21.8%であり、共有義を持たない D 型が 23.2%であることを明らかにしている。第 3 章では、学習者の日本語習熟度が初級・中級・上級へと向上するに伴い、4 タイプ (D 型、O (1) 型、O (2) 型、O (3) 型) の同形異義語において母語中国語義から日本語の意味処理への負の移転が抑制されて誤用率が習熟度順に有意に減少する傾向が確認され、また、初・中級学習者の O (2) 型同形語における中国語義から日本語への過剰な言語移転の問題が多く見られて教授上の注意点であると指摘している。第 4 章では、学習者にとって習得の難しい同形異義語における「日本語独自義」の誤用率を日本語習熟度別に調査した結果、学習者の認知処理において共有義のない D 型と共有義のある O 型とで誤用に有意差がないことを確認している。一方で学習者の日本語習熟度が初級の場合は中国語義からの負の移転を抑制することが難しいが、習熟度の向上によって D 型の誤用率が有意に減少して習得が進む傾向が認められるとして日本語独自義

の学習法を提案している。

第二部は第5章「同形語の対照情報の提示が同形語における認知処理に与える影響」、第6章「同形語の対照情報の提示が日本語習熟度の異なる学習者のD型同形語における認知処理に与える影響（上・中・初級の比較）」、第7章「同形語の対照情報の提示が日本語習熟度の異なる学習者のO(1)型同形語における認知処理に与える影響（上・中・初級の比較）」、第8章「同形語の対照情報の提示が日本語習熟度の異なる学習者のO(2)型同形語における認知処理に与える影響（上・中・初級の比較）」、第9章「同形語の対照情報の提示が日本語習熟度の異なる学習者のO(3)型同形語における認知処理に与える影響（上・中・初級の比較）」の5章で構成されている。第5章では、4タイプの同形異義語を用いて、学習者に同形語の対照に関する情報を提示する前と提示した後との二段階に分けて調査を行い、共有義のあるO(3)型における誤用率は共有義のないD型より中級・上級ともに低く、また、同形語の対照に関する情報を学習者に提示することで4タイプの同形語における誤用率はいずれも減少し、特にO(1)型における誤用は有意な減少傾向が見られることを明らかにして、同形異義語の学習法を提案している。第6章では、学習者のD型同形異義語（「先生」「質問」「機関」「大臣」「協力」「検討」「指摘」「取材」「達成」「意思」「活躍」「差別」「迷惑」「先輩」「合意」「深刻」「行事」「交代」「的確」「破綻」）における誤用を減らすため対照情報を提示する学習法を提案するために初・中・上級の学習者を対象に、二段階に分けた日本語自然さ判断調査を用いて検証し

た結果、初・中級学習者はD型同形語に接触する際、既習語である可能性が上級より低いため同形語の対照情報などを提示することで学習者の中国語義の活性化が抑制され、誤用率が有意に減少する一方で、上級学習者はD型同形語を処理する経験が初・中級より多く既習語を処理する経験から正しく認知処理できるが、情報提示の方法によっては逆に上級者に中国語義の活性化を喚起して誤用の減少に有意な効果がない場合があることを指摘している。第7章では、学習者にとって誤用しやすいO(1)型同形語（「存在」「機能」「評価」「勝負」「対応」「期間」「保護」「土地」「戦争」「期待」「立場」「発達」「適当」「公式」「観念」「作文」「遠慮」「書面」「創作」「体質」）を取り上げ、同形語対照情報を初・中・上級学習者に提示する前と後の二段階の平均点の対応について、t検定により、初・中級学習者においては母語中国語義から日本語への負の転移が抑制されて誤用の減少に有意な効果があるのに対して、上級学習者においては同形語を既習語として処理した可能性がより高いためこのタイプの同形語の誤用減少に有意な効果がないことも確認している。第8章では、日本語自然さ判断調査を用いてO(2)型同形語（「研究」「結果」「説明」「最近」「生産」「健康」「自動」「行政」「道路」「準備」「人口」「本人」「感情」「収入」「理論」「設計」「把握」「破壊」「変動」「成分」）の対照情報を提示することによる誤用減少の効果を検証したところ、第二段階で学習者は初級から上級まで「中国語独自義は日本語として成立しない」という認識を深めるようになるため中国語独自義から日本語への過剰な言語移転が有意に抑制されることを明らかにして、O(2)型

同形語の誤用を減らすための学習法を提案している。第9章では、O(3)型同形語の誤用を減らすための学習法を開発するために①中国語独自義(「使用」「基本」「指導」「推進」「作業」「専門」「表現」「発展」「成立」「単位」)による問題文について、同形語の対照情報と解答例を提示することで上級と初級は過剰な言語転移が有意に減少するが、中級学習者は有意に減少しないこと、②日本語独自義(「施行」「依頼」「承認」「人工」「出場」「開放」「熱心」「柔軟」「実在」「挫折」)による問題文について、同形語の対照情報と解答例を提示することで初・中・上級学習者に過剰な言語転移が有意に減少する傾向があることを確認して学習法を提案している。

第10章では、本論文における研究成果を踏まえて、学習者向けの日本語教育現場に期待できる効果と日中同形異義語に関する課題について述べている。

論文審査の結果の要旨

日中同形語についての研究は、同形語の日中両言語における意味の相違の原因の考察、個々の同形語に関する日中対照研究を中心にすでに多くの蓄積がなされている。しかしながら、中国語を母語とする日本語学習者を対象として学習者の同形語における誤用の実態を解明し、誤用を減少させるための効果的な学習法の開発・提案は、母語による負の言語転移を受けやすい学習者が異言語接触の場に臨むにあたって極めて重要

な研究であるにもかかわらず、漢字文化圏の言語間における表記面での学習の安易さから看過されやすく十分な研究がなされないまま現状に至っており、殆ど未開拓であるといえる。本論文は、この問題に対して、同形異義語学習のための補助教材と学習法の開発の視点から現代日本語における使用頻度の高い同形異義語を抽出して、先行研究を踏まえて、O (1) 型 (日中共有義 + 日本語独自義)、O (2) 型 (日中共有義 + 中国語独自義)、O (3) 型 (日中共有義 + 中国語独自義 + 日本語独自義)、D 型 (中国語独自義 + 日本語独自義) の 4 タイプに分類して、学習者の習熟度別に同形異義語の対照情報の提示による学習法の効果を検証・分析した研究であり、日本語学習者の同形異義語の誤用の減少に大きく貢献する成果を挙げており、高く評価することができる。

序章では、先行研究における日中同形異義語の分類を踏まえて本論文における 4 タイプの分類を規定しているが、分類の研究史および各語の語義を確認するために使用した辞書類の選定基準をよりわかりやすく示すことが望まれる。

第一部では国立国語研究所 (2005) 『現代書き言葉均衡コーパス BCCWJ』を用いて第 1 章では現代日本語の書き言葉、第 2 章で日本の教科書における二字漢語の日中同形異義語の割合と語彙を調査して、高頻度で使用される同形異義語を明らかにしており有益な情報として評価することができる。学習者の習熟度別に調査することにより第 3 章で学習者の習熟度が向上するとともに意味処理に際して母語による負の言語転移が減少し、第 4 章で学習者には難しい日本語独自義における同形異

義語について習熟度の向上とともに誤用率が有意に減少する実態を解明したことも評価することができる。なお、同形異義語の各語の分類を示すにあたっては表で示すだけでなく第1章で具体的な用例を掲げて認定基準を記述した方が分類についての説得力をより高めることになる。また、調査の例文には「先生」など日本語独自義として曖昧な語もあるので明快に判定できる例文を選定するよう留意すべきである。第2章は日本の教科書における同形異義語の量的調査というよりはここで作成されたリストにより高い価値が認められるので、これを中心に記述する余地があると考えられる。第3章で日本語習熟度の違いが同形語の意味処理の際に中国語義による言語転移による誤用に有意差があるのに対して、第4章で日本語独自義の習得に習熟度の違いで有意差がないという調査結果であれば、第3章・第4章を併せて対比的に論ずればこの興味深い指摘をより鮮明に論述することができると考えられるので、論文の構成に工夫の余地をやや残しているといえる。

第二部では、第一部における研究成果を踏まえて第五章で学習者に誤用を減らすための同形異義語の対照情報を与える学習法を提唱して、日本語習熟度の異なる学習者に対して、第6章でD型同形語、第7章でO(1)型同形語、第8章でO(2)型同形語、第9章でO(3)型同形語の認知処理についての調査を行い、習熟度別に有効性を検証し、ほぼ妥当な成果を得ており評価することができる。検証にあたって調査協力者に示す例文は検証の成否に関わるので、日本語非母語である研究者の場合は例文のネイティブチェックによって完璧を期してはいるがいささ

かの瑕瑾もなきよう留意すべきである。また、ことに学習者に対する対照情報の与え方についても今後に向けて考慮すべき課題であり、今回は付属資料として一部公開するに留めた日中同形異義語参照リストを充実させ個々の同形異義語について具体的な提示の方法を模索することがさらなる効果的学習法の開発に役立つと考えられるので今後の研究の深化が期待される。

本論文全体を通じて、学習者の日中同形異義語の誤用とその学習法について詳細な考察がなされているが、日中同形語の語義が両言語とも時々刻々変化している可能性を孕んでいることを考慮に入れば、現時点に留まらず今後の語義変化を継続的に注視して常に各語の最新の対照情報を踏まえた研究も今後さらに期待されるところである。

本論文は以上のように再考を要すべき点も含まれるが、それ以上に序章および二部 10 章に亘る綿密な調査と詳細な分析によって学習者の習熟度別に日中同形異義語の誤用の実態を解明し誤用を減少させるための効果的な学習法を提案した研究として高く評価することができる。

よって、本論文の提出者、顧偉長は、博士（文学）の学位を授与せられる資格があるものと認められる。

令和 5 年 2 月 16 日

主査	國學院大學教授	諸星 美智直	㊞
副査	國學院大學教授	菊地 康人	㊞
副査	國學院大學教授	小田 勝	㊞